



私の利き目の方であったことも災いしたかもしれません。網膜剥離を起こす前は、学生をキャンパスでみかけるとあちらが私に気づく前にすぐにそれが誰か認識できるほどだったのですが、今では英米学科の学生かそうでないかさえ見分けることができなくなりました。視覚的な意味で、ペーパーワークは以前よりずっと骨の折れる作業になり、日本語を読むことはいつも大変でしたが、術後は特に、あの細かい文字の書類を読むのは厳しいものになりました。そのため過去2年間はこれまでの物事の段取りを変えざるを得ず、授業についてよりもペーパーワークに時間を割くように変わらざるを得ませんでした。

突然の網膜剥離と手術および予後によって、自分の英語教授法も変化することになりました。特にコンピューター利用に関して変化したと思います。私は以前から授業ではコンピューターを用いてきましたが、コンピューター活用の困難はマルコム・グラッドウェルが著書「外れ値 (Outlier)」で言及している1万時間ルールにあてはまるものです。1万時間ルールとは、アンダース・エリクソンの研究調査によって示されたもので、人がなにかで秀でた成功をおさめるには、その「何か」に1万時間程度の努力を費せば、その上を目指すことが出来るレベルの技能が身につく、さらにその上を目指すことが可能になるというものです。残念ながら、これは多くの学生の勉強法、すなわちギリギリまで課題を避け、締め切り直前までとにかく終わらせようとする（そして最悪の場合締め切りに間に合わない）やり方と全く相容れません。私自身は大学時代からコンピューターを使っているのですが、その基礎が築かれるまでに費やした時間を当たり前前に考えがちです。ところが、コンピューターを利用した仕事の多

くでは眼を使うため、自分自身の仕事処理能力の深刻な低下を経験したのです。このことでパソコンの基礎知識が無い学力の低い学生が直面する困難や苦しみを以前より強く実感するようになったかもしれません。パソコンでの処理をよりスムーズにできるようになれば学習がずっと楽になることが実感として得られたということかもしれません。そのため最近ではこれまで以上に課題のためにパソコン利用の時間を増やすような工夫をし、パソコンの基礎的な技術が同時に身に付くようなものを課すようになりました。

これから私達を取り巻く環境が将来どのように変わっていくのかははっきりとはわかりませんし、大学のカリキュラムでは早期にパソコンの基礎スキルをつける機会の確保が困難（週1授業、半期システム、履修条件をつけられないなど）になっています。というのも以前はパソコンの基礎知識を高校時代にある程度つけてくるようになっていたからです。ただ、コンピューターに関してはソフトやOSの変化が速いため身につけたスキル全てが必ずしも永続的なものでないこともこの状況を難しくしています。眼が不自由になったことで、ある意味このような問題がより鮮明に「見える」ようになったと感じています。

